

答志島（とうじま）

答志島の町の中を歩き回り迷路のような路地を探索すると、伝統的な塩わかめを作っているといったシーンを含め、漁師コミュニティの日常生活を垣間見ることができます。

何世紀もの間、答志島の住民は海から生活の糧を得てきました。古代から、漁師コミュニティは八幡神を崇めてきました。多くの家や船は、円の中に八（eight）の字を描いた紋章を付けています。これは、八幡の中の一文字で、「はち」と発音します。この紋章は、海の危険から身を守り、大漁を祈願するものだと考えられています。それぞれの紋章は、毎年 1 月の八幡祭の際に、八幡神社から漁師が運んでくる墨で塗り直します。

この地の武将であった九鬼嘉隆(1542～1600)が、16 世紀の天下統一の戦乱の中で、自らの海軍を創設し、豊臣氏に味方しました。しかしながら、九鬼の息子守隆(1573～1632)は敵対する側の徳川家康(1542～1616)の下に加わりました。徳川が豊臣を打ち破った後、九鬼の息子は勝者から父の赦免を得ました。しかし、この知らせが九鬼嘉隆に届く前に、嘉隆は自刃してしまいました。答志島にある嘉隆の墓の隣にある池で、彼が使った刀が洗われたと伝説は伝わっています。